

脾臓、胆道がん手術に新手法

やまなし

医療最前线

県立中央病院から

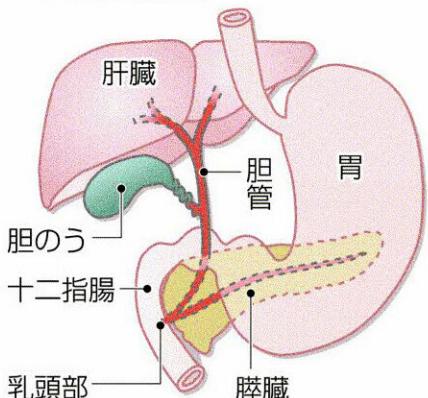
《 66 》

6時間以上を要し、患者にかかる負担が大きくなることが多い脾臓がんや胆道がんの手術。合併症を起こすリスクもあり、少しでも患者の負担を減らそうと、県立中央病院は2年前から手術に新たな手法を導入した。入院日数を短縮し、術後すぐに再発防止のための化学療法を始められるメリットがある。

肝胆脾外科副科長の鷹野敦史医師によると、肝臓、胆のう・胆管・脾臓の手術は「難度が高い症例が多く、一つ一つが大手術になることが多い」。進行がんの場合、再発防止のために術後の化学療法が必要だが、退院まで3~4週間かかっていた。

同病院は2年前から、脾臓

肝臓・胆のう・脾臓の位置と構造



切除した脾臓と小腸をつなぐ際に使用するチューブを、術後に抜く必要のないものに変更することで、合併症が起らなければ2週間以内に退院できるようになった。

鷹野医師は、「脾臓がんや胆道がんは術後の再発率が高い。手術で取り切れなかつたがんが、より小さい細胞のうちは抗がん剤治療を始めることが重要」と入院期間を短縮する意義を説明する。

一方、胆石などで胆のうを

『第2、4木曜日に掲載し

くし患者の負担軽減に努めている。15年ほど前から、腹部に3、4カ所小さな穴を開け、手術器具やカメラを挿入する腹腔鏡下手術が主流となつて対して行う「脾頭十二指腸切開術」に新たな方法を導入。

がんと胆道がんのうち、十二指腸に近い脾頭部がんや胆管がん、十二指腸乳頭部がんに対する「脾頭十二指腸切開術」に新たな方法を導入。へその部分の1カ所の穴から胆のう摘出を行う「単孔式腹腔鏡下胆のう摘出術」を取り入れた。痛みが少なく、術後の傷も目立たないという。

鷹野医師は、いずれの手術